



Data

監督・脚本：黒澤清
出演：前田敦子／加瀬亮／染谷将太
／柄本時生／アディズ・ラジ
ヤボフ

■■■ショートコメント■■■

◆黒澤清監督が、『Seventh Code』（14年）（『シネマ 32』未掲載）、『散歩する侵略者』（17年）（『シネマ 40』70頁）に続いて、前田敦子を主演に起用して、ちょっと変わった本作を。前田敦子扮する葉子は、テレビのバラエティ番組のレポーター。冒頭、湖にいる幻の怪魚を捕獲するためのレポートをするシークエンスが登場するが、これを見てもこの手のTV番組のバカバカしさがよくわかる。葉子は「この仕事はキライじゃないです」と言っていたが、さて・・・？

◆私は、NHKのBS1で何度も放映されている『映像の世紀』シリーズが大好き。それに比べると、本作に登場するディレクターの吉岡（染谷将太）や、カメラマンの岩尾（加瀬亮）たちクルーが、わざわざウズベキスタンまで行って作ろうとしているこのバラエティ番組の意義がサッパリわからない。葉子はレポートするだけのスタッフに過ぎないから、その企画にとやかく言う立場ではないが、やはり今ドキの若い女性らしく、「これは自分の本来の仕事ではない」と感じているらしい。

葉子が本来やりたい仕事はミュージカル歌手で、近々そのオーディションがあるらしい。そこでは、「愛の賛歌」を歌うのだが、葉子の言葉によると、レポーターは反射神経だけで適当にこなせても、ミュージカル歌手は心が入らなければ歌えないらしい。そりゃ、そうだろう。しかして、ある日一人で入った大きな劇場で夢か幻のように葉子が見た風景とは・・・？

◆レポーターだって、自ら手持ちカメラを持って撮影しながら“実況中継”すれば楽しいはず。たしかに、大きなバザールの中で葉子がそれをやってみると結構楽しかった。しかし、そこで発見した猫を一人で追いかけていると、いつの間にかクルーとはぐれてしま

ったから大変。しかし、それを気にせずいろいろなところで葉子がカメラを回している
と・・・。

本作では、昼間のレポートが終わり、ホテルに入った後の葉子の“一人行動”の不用心
さが目立つ。市内でバスに乗るにしても、買物するにしても、ウズベキスタンという異国
の地で若い女の子が一人でショートパンツ姿で歩き回るのは、ちょっとヤバイのでは・・・。
ましてや手持ちカメラでいろいろ撮影していると、スパイと間違えられる可能性もあるの
では？もし、中国でそんな容疑で捕まったら、日本と連絡できないまま終身刑に・・・？

そんな心配をしていると、案の定・・・。もちろん、本作は映画だから、一人警官に追
われる葉子の姿を黒澤清監督のスタッフのカメラが追っているわけだが、それにしても本
作に見る葉子の行動はあまりにも仕事人としての自覚に欠けているのでは・・・。

◆前田敦子は『もらとりあむタマ子』（13年）（『シネマ 32』125頁）でも面白い味を出
していたが、女優としての才能は相当なもの。ちなみに、今年の秋に公開される中国映画
『帰れない二人（江湖儿女/Ash Is Purest White）』に主演している女優・趙濤（チャオ・
タオ）は、「賈樟柯（ジャ・ジャンクー）監督のミュージズ」として『プラットホーム』（00
年）（『シネマ 34』260頁）、『青の稲妻』（02年）（『シネマ 5』343頁）、『世界』（04年）（『シ
ネマ 9』174頁）（『シネマ 17』289頁）、『長江哀歌』（06年）（『シネマ 15』187頁）（『シネ
マ 17』283頁）、『四川のうた』（08年）（『シネマ 22』213頁）（『シネマ 34』264頁）、『罪の
手ざわり』（13年）（『シネマ 34』269頁）、『山河ノスタルジア』（15年）（『シネマ 38』220
頁）等にずっと出演している。それを考えると、前田敦子も「黒澤清監督のミュージズ」と
言えるだろう。そんな前田敦子が本作ラストでは元AKB 48のセンターを張っていた歌
手としての実力を見せつけてくれるので、それに注目！

◆「愛の賛歌」は岩谷時子の訳文で越路吹雪が歌ったものが有名で、スタンダードナン
バーになっているが、本作で前田敦子が歌うのは、それとは全く違う解釈で作られた日本
語の歌詞。私が生涯のベスト1に挙げる映画『サウンド・オブ・ミュージック』（65年）で
は、冒頭アルプス山脈の高原の上で、ジュリー・アンドリュース扮する修道女マリアが、「The
hills are alive with the sound of music」と歌ったが、本作で前田敦子扮する葉子が「愛
の賛歌」を歌うのはウズベキスタンの高原の上。さあ、そんな異国の地の美しい風景の中、
葉子はいかに心を解放して自分流の「愛の賛歌」を歌うのだろうか？なるほど、こんなク
ライマックスにしているから、本作のタイトルは『旅のおわり 世界のはじまり』に！

2019（令和元）年6月25日記